

The *Ancrene Wisse* , 第四章 , Temptation–‘Temptatiun’ : 説教の語り口 , 修辞法 , 構成法等に言及した試論 (第 5 編)

貝 原 洋 二

The *Ancrene Wisse* 4. Temptation–‘Temptatiun’ : An Essay on Speech, Rhetoric and
Composition of the Author’s Preaching (5th series)

Yoji KAIHARA

This present paper is designed to explain and make clear the preacher’s implications of his so called ‘froure’, frover, in his sermon of the rules of an anchoritic life for the three young anchoresses, especially referring to hardships in an anchoritic life expressed as ‘froure’, frover or comfort. The author endeavours to give an account as a comfort of severe self-disciplined and abstains from all forms of pleasure for religious or spiritual reasons based on various daily life experiences and knowledges as well as sentences extracted from the classical well-known works and texts, chiefly from the Bible. Following the writer’s preceding papers so far written on the similar theme, he intends to investigate and analyse the author’s ideas and intentions, mentioning religious austerities in such a word and so on, through my own careful reading of the text.

Key words : temptation, comfort, leave, weakness
誘惑, 慰め, 許可, 弱さ

序

今回書いた小論は過去 4 回にわたって『近畿福祉大学紀要』第 1 巻, 第 1 号, 2000, 第 2 巻, 第 1 号, 2001, 第 3 巻, 第 1 号, 2002, 第 4 巻, 第 1 号 (通巻 4 号) 2003 に於いて書いて来た一連の論考の最新編, 第 5 編に該当する。各小論は上記テキストの頁を追って同一の主題のもとに, 同一の研究の基礎の上に立って, 同一の方式で書かれたものである。筆者がどの様な意図, 目的, 考え方, 計画に基いてこの一連の試論を書き続けているかは上記紀要の第 1 巻, 第 1 号の冒頭にその概要が示されているが, 改めてこの場に於いてその要点を繰り返し述べておこう。

筆者は長年にわたって上記作品の言語に就いて試論

と言う形に於いて自分自身の作品の読みのアプローチに従って研究して来, それを小論に於いて作品の言語との絡みの中で内容, 説教の技巧, 構成等を出来るだけ総合的に有機的, 一体的に把らえ記述しようとして来た。作品をなるべく分解, 分析, 分類した形では示さずに, 小論の読者がそれを読む時, 実感として作品を読んで把らえられる場合に出来る限り近い理解が得られる様に書こうと努力した積りである。論文と言う程の正確さ, 厳密さ, 科学性, 論理性は従って余り重点を置いた記述には必ずしも書かれていない。これは私が文学作品の言語の研究と読書に於いて常に採って来た方法である。作品の生まれた時代, 作者等を最大公約数として考えるいわば歴史的又比較的研究法で, フランスの Émile Legouis と Louis Cazamian 等の著し

受付 平成 16 年 3 月 31 日, 受理 平成 16 年 5 月 21 日

近畿福祉大学 〒679 2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡 1966 5

た, *A History of English Literature* (Helen Douglas Irvine による英訳) の中で著者が採った方式に学ぶ処が非常に多く又納得し得る事から来ていよう。

この現今の小論で考察したテキストの範囲は前回のその続編として書かれている。前回の小論はテキスト(116:29)迄論ぜられたので今回の場合はその続き(116:30)より始まり(120:19)迄を論じてみたい。

本 論

作者は先ず始めに(116:30-117:7)に於いて, この世の中には七大原罪に起因する数多くの人への誘惑があり, それは誰もその一つ一つの名を挙げて説明出来るものではないが私が今これ迄取り挙げて説明した全てに就いては気をつけなければいけない。この世の人々の中にはその罪のいくつかに誘惑される人も極く僅かながら居るかもしれないか全く一人も居ないかもしれない程であるのだ。悪魔の誘惑の手管は地獄の蛭にも喩えられる彼の薬剤のいっぱい詰まった沢山の容器を持っていて人々に対しそれを飲む様に一つを断れば又別の一つをと次々に差し出し, そこで相手は最後には受け取ってしまう。さてここで彼のそのフラスコ容器に就いて考えてみよう。彼のこの全ての誘惑に対し以前に約束した様に多くの種類の慰めとその後で神の恩寵と共に救済の説教を聞いて下さい, と云った内容の説教を先ず初めにその概要と要点と説教目的, 趣旨等々を喩的に言う。

次の段落はテキストの区分に従って(117:8-18)をみると, 説教の語り口調は次の様な喩によって表現されている。始めに要旨を, 高い生活にある人程, 悪魔の誘惑は確実なのである(*siker beo of fondunge hwa se eauer stont in heh lif.*) と言い, 以下がその最初の慰めです, と言って塔は高ければ高い程風当りが強いからです, あなた方自身, 塔なのです, 然しあなた方が真にお互いが固く糊でくっつき合っている様に, 一つの愛で結ばれている間は恐れる必要はありません。偽りの糊, つまりあなた方の間の愛が悪魔の *Wursi*

Wursen でない限りは。然しそれが相手をくっつけているのを止めた瞬間, 彼女は他方が彼女をしっかりと掴まえていない限り直ちに吹き飛ばされてしまうであろう。その様はぐらぐらになった石が塔の頂きからうす汚なくよごれた罪の深い溝の中に落ちてしまうであろう様子に似ていると言えましょう(117:9-18)と説いている。二人を結びつけている愛の内容は糊の喩えを使い, それが剥がれる場合はその愛が虚偽のものである場合, つまり悪魔の持つ悪意による場合に匹

敵させている。そしてその弱さ, 空しさを塔の頂きに置かれてぐらついている石が塔から真下に転がり落ちるイメージでもって表現している。以上が説教者が先ず最初に説く悪魔の誘惑に対してそれに耐える事がどんな意味とか必要性とか価値, 効用があるかの慰め(*froure*)の説教文である。修道生活の厳しさの持つ第一意義の説教文である。

第二番目に説かれる慰め(*an oðer elne*)の説教はテキストの区分の段落に従って(117:19-25)とする。ここでは慰めの内容の要旨は神がいつもその手中に置いている間はその人は悪魔の攻撃を受けないのです, と説いている。その語り口調は, 悪魔が誘惑している時こそ人々は神の加護を多く受けているのです, と第一の慰めの説教で高い塔で風を強く受けていると同様, 高い生活をする者程, 悪魔の攻勢は強い, それ故に神の愛をより強く得ようと求める, だから幸せなのでと言う論理をこの場合にも説く。その喩は ‘*Ʒe tur nis nawt assailet ne castelne cite. hwen ha beoð iwunnen.*’ が表現している(人々がそれらを占有している時は塔も城も攻撃されない)と説いた直後に ‘*Alswa Ʒe helle weorrur ne asaileð nan ... Ʒe he naueð nawt*’ (同様に地獄の戦士は彼(神)が手中に置いている人に対しては誘惑を仕掛けて来ない。然し彼がそうしていない人に対しては仕掛けて来る)と説いて悪魔の誘惑がどんな場合に起こるのかを彼, 神の加護との関わりの中で教える(厳しい生活に生きている人々に対しては神の加護がある)。そして最後に説教の結論として ‘*for Ʒi leoue sustren hwa ... leste ha beo biwunnen*’ (攻撃されない彼女は自分が占有されなくなる(神の加護を受けられなくなる)事を大いに恐れるであろう)。以上が第二番目に語られた慰めの説教である。説教の説得の手順, 方法は第一の場合と略々同一と考えられる。初めに世の中の常識とか事実, 実際の具体例を挙げて, それを修道生活に入る若い三人の乙女に当てはめて, 説教者の説教目的に合わせて実際例との類似性を土台にして喩的, 直喩的語り口で説明して説得している。

第三番目の慰め(*Ʒe Ʒridde cunfort*)の説教はテキストの区分に拠ると(117:26-32)の文章がそれに該当する。ここでは我々がこの世で誘惑を受ける事をお悩みに神は為られてはおられないのですと言う説教内容が語られる。その語りの文章はテキストに従って読むと大体次の様に語られている。‘*Ʒe Ʒridde cunfort is Ʒ ure lauerd seolf i Ʒe Ʒater noster ... Et ne nos inducas in temptationem.*’ と言い, その直後に ‘*Ʒ is lauerd feader ne suffre ... wið consens of heorte. wið skiles*

gættunge.’と述べてその内容をパラフレーズしている。要旨は神は我々が悪魔の誘惑を受ける事に悩まれる様な事は当然無いであろう、注意して欲しい事は我々が悪魔の誘惑を受けない様に祈る事を望んでおられないと言う事です。と言うのもこの世は浄界であり、浄火であるからであって、神は我々が心、良心を与えてしまう事に心の了解を得てそこに連れて来られる事の無い様に望んでおられます。以上が第三番目に説かれた慰めの説教の内容である。つまり我々がこの世に在って悪魔の誘惑にさらされる事には神は特段の心遣いをされている訳ではなくて、と言うのもこの世は元来、浄界であるから、神が心配している事はそれよりは我々が、良心を悪魔に渡してしまうことに同意した気持でそこに誘惑されてやって来る事なのです、と説いて我々が浄界に在って飽く迄も苦行、受難に耐え、悪魔の誘惑に対し持ち応える事を望まれている。これが説教者が三人の修道女見習いに説く処の慰めの説教である。

第四番目に挙げられた慰め(Ʒe feorðe froue)は闘いに於いて神の助けがある事のその確実さに就いてである。この事は聖パウロによっても証明されている、と言って拉丁語で彼の言葉を引用してその根拠にしている(Ʒe feorðe froue is sikernesse of godes help iƷe fehtunge aƷeīn as ... ultra quam pati possumus. set ⁊ cetera.)そしてそれは直後に英訳される‘Godd he seið is treowe nule he neauer suffrīn Ʒ ... Ʒ we mahen Ʒolien’神は悪魔が我々を誘惑する事を、我々がそれに耐えることができるのを十分見届ける限りの場合であれば決してその為に悩んだりにはされない。然し神はその誘惑に於いて悪魔に対してその誘惑の限界を、つまりお前は彼女をここ迄誘惑しても構わないけれども、これ以上はしてはいけなと言わんばかりに印を付ける。そうしてその限度内で誘惑に耐える力を与えられるのです。悪魔はそれを少しでも越える事は出来ません。ここでの以上の慰めの説教は聖パウロの言葉を根拠にして悪魔の誘惑に対して耐える際の神の助けに就いての分かり易い比喩的説教の文章で表現している。(Ah i Ʒe temptatiun he haueð iset to Ʒe feond a mearke as Ʒah he seide ... Ʒe feond ne mei nawt forðre gan a pricke.)がその説教文である。

第五番目の慰めの説教(Ʒe fīfte froue)は(118: 10 - 29)に於いて語られている。ここでも神の許可が無かったら悪魔はどんな、たとえそれが人にとって現状に於いて不利な条件下に在って、それを逃れ得る場合ですら、神の許しが無いと出来ない、と言う内容の説教である。その説教は以下の様に語られている。

‘ ANt Ʒis is Ʒe fīfte froue. Ʒ he ne mei na Ʒing don us: bute bi godes leaue. Ʒ wes wel ischawet as Ʒe godspel teleð.’で始まる。その直後では拉丁原文を引用してそれをもっと具体的に説いている。‘ Ʒa Ʒe deoflen Ʒet ure lauerd weorp ut of a mon: bisohten ⁊ seiden. Si eicitis nos hīnc: mittite nos in porcos.’(主が人間から追い出した悪魔を求めそして話しかける時にでも、主よあなたが我々をここから追い出すならば、その時は我々を次には豚小屋に置いて下さい。)その原文は次の様にパラフレーズされている。‘ Ʒef Ʒu heonne drīuest us: do us i Ʒeos swīn her. Ʒe eoden Ʒer an heorde.’更にその実例として説教者は次の説教をしている。‘ Ant he Ʒættede ham’(彼らにそれを許したのでした)と言って‘ lo hu ha ne mahten nawt fule swin swenchen wið uten his leaue. Ant te swīn ananriht urnen an urn to Ʒe sea: to adrenchen ham seoluen.’(みよ、彼らは主の許し無くしては汚れた豚をさえ溺れさせる事ですら如何に不可能であるかを、そして豚は直ちに海に向かって走り、彼ら自身を溺れさせてしまいました。)その理由としての説教は‘ Seinte Marie swa he stonc to Ʒe swīn. Ʒ ham wes leoure to adrenchen ham seoluen: Ʒen forte beoren him.’(聖マリアに誓って言うが、彼は豚に悪臭を吹っかけたが豚達にとっては自からを海に溺れさせる方が彼のそれに耐えるよりは心地よかったからです)と説き、更に‘ ant an unseli sunful godes ilicnesse bereð him in his breoste. ant ne nimeð neauer Ʒeme. Al Ʒ he dude iob: eauer he nom leue Ʒrof ed ure lauerd ... hwi is hit bute for hare muchele bihene Ʒah hit ham greuf sare.’の実例を挙げての説教も、全て同じ趣旨、神の了承、了解のもとでないと何事も人間にしても、悪魔にしても事はすすまない事を示唆した説教文と思われる。

次の第六番目に挙げられた慰めの説教(Ʒe Seste confort)はこれ迄の説教の長さ比べて慰めの説教中では最も長く(118: 30 - 120: 19)にわたり、語彙数にして約700語位かと思われる。これ迄の説教文では一つの慰めの説教当り概数語彙数は90語 - 200語の範囲内で語られていることからすれば異常な程長い慰めの説教であると言えよう。その慰めの説教の要旨は以下で詳しく説かれている様に神が我々をお試しになる為に我々から意図的に遠ざかり、我々の為に神の加護、恵みを調節されておられるのです、と言った内容のものである。その第六番目の説教文の構成を辿りつつ説教者の説教目的、意図、表現、論理の展開、説教法等を以下にみでみる。先ず初めに‘ Ʒe Seste confort is Ʒ ure lanerd hwen he Ʒoleð Ʒ we beon itemptet: he pleieð wið us as Ʒe moder wið hire Ʒunge deorling ... ⁊

cusseð ⁊ wipeð his ehnen.’ と言う(神は我々が誘惑されるのを我慢しておられる時には、神は我々を試しておられるのです。それは丁度母親が彼女の愛しい若い子供等をそうして試されるのと同じ場合です。彼から逃げて自分の姿を隠し、彼を一人ぼっちにし、辺りを一生懸命見周わさせ、「お母ちゃん、お母ちゃん」と言って叫び、しばらくは泣き、その時母親は両手を広げて笑い乍ら飛んでその傍に行き、抱きしめて、口づけをし、彼の涙を拭いてやる)。丁度これと同じ様に我が主は我々を一寸の間、独りぼっちにさせ、彼の恩寵、慈みを引き込み、その結果我々は我々が正しく為している如何なる事柄に於いても神の優しきを見出せず、心の喜びも亦見出せない。そして、然し乍ら我が主は我々をその事柄に於いて決してそれだけそれらを減らした事ではなく、多くの愛の故にそうしているのです。そしてダヴィデはその事をよく理解した時、次の様に言っています。如何なる場合に於いてもあなたは私を見捨てられたのではありません、と。彼は次の様に言っています、どうか主よ、あなたは私を見捨てないで下さい、よく見て下さい、その有様を、神が彼の許を去ったのだが全く去ってしまった訳ではない。ここで説教者は神は何故にそんな事を為されるのか、その理由を以下の如く説明している。その理由は合計6つある(Ant six acheisuns notið. hwi godd for ure god wiðdraheð him oðerhwiles.)と最初に言う。以下にその説教文を詳しく具体的、比喩的に例示して、如何なる理由で神が我々から一時身を引くのかと、その説教の説得法、修辞法、言語的特徴に就いてなるべく原文と訳文を示しつつ述べてみたい。第一番目の理由を述べる文章は‘An is þ we ne prudent.’で終る。次に第二番目の理由を述べる説教では‘An oðer þ we cnawen ure ahne feblesce ... Hald hit wel þe hwile up ne derue hit te se sare.と他の理由と比べて異常に長く語られている(約200語以上)。その内容と言語表現を分析してみると、‘þ we cnawen ure ahne feblesce Vre muchele unstrengðe ⁊ ure wacnesse.’その効用として Ant þis is a swiðe muche god as seint gregoire seið ... þenne mei þe þe up haldeð hit felen hu hit weieð.’の説教文の中で証拠を示しつつその事の価値、有用性、役割、効用等を説いている。その初めは聖グレゴリーの言葉が引用され、‘as seint gregoire seið Magna perfectio est sue in perfectionis cognitio.’と拉丁原文が示される。それは直ちに英語に訳され‘þ is muche godnesse hit is to cnawen wel his wrecchehead ⁊ his wacnesse.’(自分の哀れさ、弱さをよく知る事は非常に良い事です)。更に引き続いて‘Ecclesiasticus Intemptatus qualia scit.’原

文の直後に‘Hwet wat he seið Salomon þe þ is unfondet.’(誘惑を受けていない者に何が分かりましょうとソロモンは伝導の書の中で言っています)と英訳される。そして更に‘⁊ seint austín bereð seín(t) gregoire witness. wið þeose wordes.’と言った直後に拉丁原文を引用し、‘Melior est animus cui ... ⁊ terrarum fundamenta.’と述べて直ちに英訳される、‘Betere is þe þe trudeð ⁊ ofsecheð wel ut his ahne feblesce: þen þe þe meteð hu heh is þe heouene: ⁊ hu deop þe eorðe’(或る意見を持ち自分の弱さに就いての発見を為している者は天国が何の位高いかを計って知っていて、この地がどんなに深いかも知っている者よりは幸いである)。そして終りに日常の生活体験上の知識を借りて、‘Hwen twa beoreð a burðerne. ⁊ te oþer leaued hit: þenne mei þe þe up haldeð hit felen hu hit weieð.’(二人の人間が一つの荷物を運んでいる時に一方の人がそれを手放した時、その時それを尚も持ち続けている方の人間はそれが如何に重いものであるかを感じる)と述べて神の加護が一時遠ざかる事の持つ意義を説いている。ここで愈々説教はそれらで十分理解させた上で次の様に説いている。‘Alswa leoue suster hwil þ godd wið þe bereð þi temptatiun: nast tu neauer hu heui hit is. ⁊ for þi ed sum chearre he leaued þeane. þ tu understonde þin ahne feblesce ⁊ his help cleopie. ⁊ ⁊eie lude efter him ⁊ef he is to longe. Hald hit wel þe hwile up ne derue hit te se sare.’(同じ様に、愛しい妹よ、神があなたへの悪魔の誘惑をあなたと共に支えてくれている間はあなたはそれが如何に重たいかを決して知ることはない。そしてそれ故に彼がその荷物を手放してあなた自身の弱さを理解し彼の助けを求めて叫び、もし彼が遠くに行ってしまうたら彼を求めて泣き叫ぶ、それを手放さずしっかり持っていて下さい、しばらくの間、それがあなたにとってそんなに重たくてきついものでないならば)は説教の直接の相手に対して修道生活に於ける苦しみに対する正しい理解を説いた好ましい説教文と言えよう。次に続く説教はこれとは対照的にそうあってはいけない場合を、これも日常生活の体験と常識から理解される具体的事例を示して、最後に‘swiðe he is to edwiten.’(彼は大いに非難されて然るべきです)、と結んでいる。‘Hwa se is siker of sucurs þ him schal cume sone. ⁊ ⁊elt tah up his castel to his wiðerwines: swiðe he is to edwiten.’(彼のもとに間もなく来るであろう援助を確信し、然し乍ら彼の城を敵に渡してしまう人は大いに非難されて然るべきである)。ここで更に次のお話を考えてみて下さい、‘þencheð her of þe tale hu ... þen heo beoð to help on ure halue.’と言って、悪魔

の誘惑に遭っている一人の聖者の話をする。‘ Þencheð her of þe tale hu þe hali mon in his fondunge seh bi west ... þen heo beoð to help on ure halue. ’(悪魔の誘惑に冒されている聖者が西の方角に彼に対して危害を加えようとする悪魔の大群を見て大いに恐れた余り彼の信仰の力を捨ててしまう、するとその時他のもう一人の者が彼に次の様に言った、東の方角を見て下さい、‘ Plures nobis cum sunt quam cum illis. ’、我々は彼等よりは我々の側にあつて助けてくれる人々を多く持っている、と云うことです)。この様に前半のダヴィデ王、グレゴリー聖人、「伝導の書」の中でのソロモン王の言葉の原文、拉丁語からの引用に基く英訳並に生活経験上からくる常識を根拠にした説教に対し、後半の2つの事例は信仰の持つ力を頼り過ぎる事の過ちと、又逆に軽視する事の不義を分かり易い実例で以って、そしてその中の前半は原文を以って示し英訳している。

この説教の終りの処で ‘ for þe þridde þing is þ̅ tu neauer ne beo al siker ... ⁊ ba þeose streonið in obedience. ’(と云うのは第三番目の慰めの説教はあなたは決して余り神の加護を確信をしてはいけないうことと余り軽視し過ぎててもいけないと云う事です。と言いますのも確信をしてしまうと気を付ける事、用心する事が散漫になることとそれを軽視するからなのです。両方共神に服従する心を失なわさせる事になりましたと説いている。それに続いて説教文は ‘ Þe feorðe acheisuns is hwi ure lauerd hut him: þ̅ tu seche him ðeomluket. ⁊ cleopie ⁊ wepe efter him as deð þe lutel baban efter his moder. ’(第四番目の理由、何故神は自分を隠されるのかは、あなたが彼をより一生懸命に探して呼び、彼を求めて泣くからです、その様子は小さい赤ん坊が母親を求めてそうするのと似ています)。この説教は上述の二人が持っている荷物を一人が手放すと重いのもう一人の者の有難さが分かる事例と同じく日常生活体験から聴き手に分かり易い具体的説明と思われる。それに続く説教文は、‘ Þrefter is þe fiftte. þ̅ tu his ðeincume underuo þe gleadluket. ’(次に第五番目は、あなたは彼が帰って来てくれた事をより一層の喜びを以って受け入れるからです)で終る。第六番目はその直後に、‘ Þe Seste þ̅ tu þrefter þe wisluket wite him hwen þu hauest icaht him ⁊ festluket. halde. ⁊ segge wið his leofmon. Temuf eum nec dimittam. ’あなたが彼を掴まえた時あなたはその後彼をより賢明に見守りそしてよりしっかり持ち続けそして彼の恋人と共に私は彼をしっかり掴んで彼を手放したりはしないであると云うであろうからですと云って計6つの第六番目の慰めの為の説教の根拠、理由が最も詳しく長々

と説かれる(‘ þeose six reisuns beoð under þe seste froure þe ðe mahen habben mine leoue sustren aæines fondunge. ’)以上6つの理由はあなた方、私の愛しい姉妹達よ、が悪魔の誘惑に対しての第六番目に説いた慰めの為の説教の理由なのです)。

慰めの為の説教はこの後にも続けられ合計9つの説教が為されるのである(123:13)迄続く。今回の論考は締切り期限迄の期間がいつもの半分位いしかなかった事とか筆者の体調不調等も重なって準備が十分出来なかった為予定量の約半分でまとめを書く結果となってしまった。以上に於いて結論をそこ迄の論考を基礎にしたまとめを筆者の研究的経験を踏まえて一応記しておきたい。残りは原稿化は出来ていないが一応の準備は終わっているのでこの次の原稿ではこの続きから始め度い。この辺りは作品中最長の第四章 - 第八章で全作品は終る - の半分少し過ぎた辺りで、全作品中でも半分をやや越えた処である。

結 論

悪魔の誘惑、特に身体に於ける性的、猥褻的淫乱を中心とする説教が行なわれて来た。この悪魔の誘惑に対して如何に耐えて、神に愛されるべきなのか、この苦行、修業の持つ意義、価値を説教者は一種の慰めの面から説いてそれに耐える事を勧める、今の度の論考はその始り辺りから合計9つの慰めの面からの説教中、第六番目迄を取り挙げてその説教を内容と言語の両方からアプローチしようとした。具体的には説教者の説教目的、説教のやり方、方法、修辞法、構成等が考えられるのでそう言ったものについてまとめてみたい。

説教者は苦行、修業する事、耐える事、その様な生活とか体験、実行はこの世の中にあつて価値の高い、神が人に殊更に求めているものであると説き、この世の中に生きて行くにつけ様々な誘惑があり、それは快樂を伴うものであり、それを遠ざける為には人は修業の生活をして行くのであるが、その厳しい生活はつまりは高い生活なのであつて、それを勧める神の心は今の度論ぜられた慰みの説教の中で、神の苦行者への慰めの贈りもの、恵み、心遣いとみなし、喩えを以って説かれる。これが今回の説教者の説教の趣旨、目的、意図である。それは初めの ‘ þe earste froure ’(117:8 - 18)の中で最も明確に語られている。

説教はその内容の理解と説得に当たって説教者はその根拠、正しさの証明、妥当性を示すことによって実り有るもの、効果有るものにし度いと願っている。従つて各慰めの説教に於いてその根拠を分かり易い実

例, 日常生活体験とか常識, そして典拠, 主に聖書の中から取り, それを多くは拉丁語聖書の原語で述べた後に分かり易く意図的, 解釈的意味に直して翻訳しているので単なる翻訳ではない。様々な知識, 常識と日常生活の中での体験の具体例の提示と典拠を踏まえての多様な説得によって苦行, 修業の持つ意義を確かに伝える努力は説教者の主な役割, 仕事である故に, この面での説教の文章は創作上も表現上も重要な側面を持っている。これがこの説教の主要な目的, 意図であり, 説教者の説教能力を問われる部面であると言える。

説教の言語面での説教者の技能, 素質の有無は説教内容, 目的に適わしい説得力ある語りの有効な表現, 修辞法がとられているかをみると, 説教は全般に亘って比喩の口調を巧みに使ってなるべく具体的で, 隠喩的性格の文章の表現を作文に於いてとっている。神と悪魔と聞き手の三者がそれぞれの役割を持っていて, それを説教の目的に合わせて文章表現する時, その相互の役割と目的が聞き手 - 同時に登場者でもある - に分かり易く, 具体的な表現で以って説教を組み立てる, と言った説教文になっている。何れの慰めの為の説教もその長さには一定性は無く不揃いではあるが, 第二と第三番目に語られる説教文は中でも短い場合ではあるが, 第二, 第三共, その根拠が明確に示されることによって短かい説教文ではあるがその説教者の説教目的, 意図は聞き手に了解され, 且つ説得力を持つ表現と内容になっていよう。

今この度の小論作成に当って使用したテキストは前回同様のテキストの, *The English Text of the Ancrene*

Riwle. Ancrene Wisse. edited from Ms. Corpus Christi College Cambridge 402 by J. R. R. Tolkien である。() 内に示した数字は上記テキストの頁: 行の数字である。作品の解釈, 意味の理解に当って英語の単語は全て *Middle English Dictionary*, Part A1~Part X-Y-Z, the University of Michigan Press, Ann Arbor, 1956-2001 に拠っている。*The Oxford English Dictionary* (1978, repr.) も参考迄と *Modern English* に関して意味を考える時に時々当たったが, 中英語の語彙に関しては *OED* は殆んど利用する必要は無く又 *OED* では不十分である。従って上記 *MED* が近年, 最終巻 ‘X-Y-Z’ が出版されて完結した事は中英語の作品の研究者にとっては, *OED* が1933年に完結された時の満足と喜びに匹敵する安心感をしみじみ味合うことが出来たであろう。これが無かったならばこの手のレヴェルの小論ですら不安で書けないであろうとつくづく思う。尚, 拉丁語に関しては主に利用した辞書は, *An Elementary Latin Dictionary*, by Charlton T. Lewis, Oxford University Press, 1985, それでは不十分な場合にはその親版でもある, *A Latin Dictionary* by Charlton T. Lewis, Oxford, at the Clarendon Press, 1984. に拠っている。

今後この小論の続きは筆者は同じ目的, 意図, 計画に従って研究的作業は続ける予定ではあるが公刊は今この度の『紀要』では今回が最後になろう, 停年退職により在籍しなくなり資格が無くなる事によるものである。

以 上(未完)

haueð se monie buistes ful of his letuaires þe luðere leche of helle. þe forsakeð an.' he beot an oðer forð anan riht. þe þridde. þe feorðe. ⁊ swa eauer forð aþet he cume o swuch.' þ me on ende underuo. ⁊ he þenne wið þ birlæð him ilome. þencheð her of þe tale of his ampoiles. Héreð nu as ich bihet aȝein alle fondunges moni cunne froure. ⁊ wið godes grace þrefter þe Salue.

Siker beo of fondunge hwa se eauer stont in heh lif. Ant þis is þe earste froure. for eauer se herre tur.' se haueð mare windes. ȝe beoð tur ow seoluen mine leoue sustren. ah ne drede ȝe nawt hwil ȝe beoð se treo weliche ⁊ se feste ilimet wið lîm of anred luue euch of ow to oþer. for na deofles puf ne þurue ȝe dreden bute þ lîm falsi. þ is to seggen. bute luue bitweonen ow þurh þe feond wursi. Sone se ei unlimeð hire.' ha bið sone iswipt forð.' bute ȝef þe oþre halden hire.' ha bið sone ikeast adun as þe lowse stan is from þe tures cop.' in to þe deope dich of sum suti sunne.

Nv an oðer elne. Muchel ah to frourin ow hwen ȝe beoð itemptet. Þe tur nis nawt asailet ne castel ne cite. hwen ha beoð iwunnen. Alswa þe helle weor rur ne asaileð nan wið fondunge. þe he haueð in his hond.' ah deð þeo þe he naued nawt. for þi leoue sustren hwa se nis nawt asailet.' ha mei sare beon of dred leste ha beo biwunnen.

Þe þridde cunfort is. þ ure lauerd seolf iþe pater noster tea cheð us to bidden. Et ne nos inducas in temptationem. þ is. lauerd feader ne suffre þu nawt þe feond þ he leade us allunge in to fondunge. lo neomeð ȝeme. he nule nawt þ we bidden þ we ne beon nawt ifonet.' for þ is ure purga toire. ure cleansing fur. Ah þ we ne beon nawt allunge i broht þrin wið consens of heorte. wið skiles ȝettunge.

(117 : 1-32)

Þe feorðe froure is sikernesse of godes help iþe fehtunge aȝein as seinte pawel witneð. Fidelis est deus qui non sinit nos temptari ultra quam pati possumus. set ⁊ cetera. Godd he seið is treowe nule he neauer suffrin þ te deouel tempti us ouer þ he sið wel þ we mahen þolien. Ah i þe temptatiun he ha ueð iset to þe feond a mearke as þah he seide. Tempte hire swa feor.' ah ne schalt tu gan na forðre. ant swa feor he ȝeueð hire strengðe to wið stonden. þe feond ne mei nawt forðre gan a pricke. Ant þis is þe fifte fro ure. þ he ne mei na þing don us.' bute bi godes leaue. þ wes wel ischawet as þe godspel teleð. þa þe deoflen þet ure lauerd weorp ut of a mon.' bisohten ⁊ seiden. Si eicitis nos hinc.' mittite nos in porcōs. ȝef þu heonne driuest us.' do us i þeos swin her. þe eoden þer an heorde. Ant he ȝettede ham. lo hu ha ne mahten nawt fule swin swen chen wið uten his leaue. Ant te swin ananriht urnen an urn to þe sea.' to adrenchen ham seoluen. Seinte Marie swa he stonc to þe swin. þ ham wes leoure to adren chen ham seoluen.' þen forte beoren him. ant an unseli sunful godes ilicnesse bereð him in his breoste. ant ne nimeð neauer ȝeme. Al þ he dude iob.' eauerhe nom leue prof ed ure lauerd. Þe tale i dyaloge lokið þ ȝe cunnen. hu þe hali mon wes iwunet to seggen to þe deofles neddre.

Si licenciam accepisti.' ego non prohibeo. ȝef þu hauest leaue do sting ȝef þu maht. ⁊ bead forð his cheke. ah he nefde þa nan bute to offearen him ȝef bileaue him tru kede. ⁊ hwen godd ȝeueð him leaue on his leoue children hwi is hit bute for hare muchele biheue þah hit ham

Þe Seste confort is þ ure lauerd hwen ¶.greuf sare. he þoleð þ we beon itemptet.' he pleieð wið us as þe

(118 : 1-31)

moder wið hire ȝunge deorling. flið from him ⁊ hut hire. ⁊ let him sitten ane. ⁊ lokin ȝeorne abuten cleo pien dame dame. ⁊ wepen ane hwile. ⁊ þenne wið spred de earmes leapeð lahhinde forð. cluppeð ⁊ cusseð ⁊ wi peð his ehnen. Swa ure lauerd let us ane iwurðen oðer hwile. ⁊ wiðdraheð his grace. his cunfort ⁊ his elne. þet we ne findeð swetnesse i na þing þ we wel doð. ne saaur of heorte. ⁊ þah i þ ilke point ne luueð us ure lauerd neauer þe leasse. ah deð hit for muche luue. Ant þ un derstod wel dauð þa he seide. Non me derelinquas usque quaque. Allunge qð he lauerd ne leaf þu me nawt. lo hu he walde þ he leafde him.' ah nawt allunge. Ant six acheisuns notið. hwi godd for ure god wiðdraheð him oðerhwiles. AN is þ we ne pruden. AN oðer þ we cnawen ure ahne feblesce. Vre muchele unstrengðe ⁊ ure wacnesse. Ant þis is a swiðe muche god as seint gregoire seið. Magna perfectio est sue imperfectionis cog nitio. þ is. muche godnesse hit is to cnawen wel his wrecchehead ⁊ his wacnesse. Ecclesiasticus. Intemptatus qualia scit.

Hwet wat he seið Salomon þe þ is unfonet. ⁊ seint austin bereð sein(t) gregoire witness. wið þeose wordes. Melior est animus cui propria est infirmitas nota.' quam qui scrutatur celorum fastigia ⁊ terrarum fundamenta.

Betere is

þe þe truddeð ⁊ ofsecheð wel ut his ahne feblesce.' þen þe þe meteð hu heh is þe heouene.' ⁊ hu deop þe eorðe. Hwen twa beoreð a burðerne. ⁊ te oþer leaueð hit.' þenne mei þe þe up haldeð hit felen hu hit weieð. Alswa leoue suster hwil þ godd wið þe bereð þi temptatiun.' nast tu neauer hu heui hit is. ⁊ for þi ed sum chearre he leaueð þeane. þ tu understonde þin ahne feblesce ⁊ his help cleo pie. ⁊ ȝeie lude efter him ȝef he is to longe. Hald hit

(119 : 1-33)

wel þe hwile up ne derue hit te se sare. Hwa se is siker of sucurs þ him schal cume sone. ⁊ ȝelt tah up his cas tel to his wiðeriwines.' swiðe he is to edwiten. Þencheð her of þe tale hu þe hali mon in his fondunge seh bi west toȝeines him se muche ferd of deoflen. ⁊ forleas for muche dred þe strengðe of his bileaue. aþet te oðre seiden him. Bihald qð he bi esten. Plures nobiscum sunt quam cum illis we habbeð ma þen heo beoð to help on ure halue. for þe þridde þing is þ tu neauer ne beo al siker. for sikernesse streoneð ȝemeles ⁊ ouerhohe. ⁊ ba þeose

streonið inobedience. Þe feorðe acheisun is hwi ure lauerd
hut him: þ̅ tu seche him ȝeornluker. ⁊ cleopie ⁊ wepe efter
him as deð þe lutel baban efter his moder. Þrefter is
þe fifte. þ̅ tu his ȝeíncume underuo þe gleadluker. Þe
Seste þ̅ tu þrefter þe wisluker wite him. hwen þu ha
uest icaht him ⁊ festluker halde. ⁊ segge wið his leof
mon. Tenui eum nec dimittam. þeose six reisuns beoð
under þe seste froure þe ȝe mahen habben mine leo
ue sustren aȝeines fondunge.

Þe Seoueðe confort is. þ̅ alle þe hali halhen weren
wodeliche itemptet. Nim of þe heste on alre earst.

To seinte peter seide ure lauerd. Ecce sathan expetiuit
uos ut cribraret sicut triticum ⁊ cetera. Io qð he sathan is
ȝeorne abuten forte ridli þe ut of mine icorene. Ah
ich habbe for þe bisoht þ̅ ti bileaue allunge ne tru
kie. Seint pawel hefde as he teleð him seolf flesches
pricunge. Datus est michi stimulus carnis mee. ⁊ bed ure
lauerd
ȝeorne þ̅ he dude hit from him. ant he nalde ah seide.
Sufficit tibi gratia mea. Virtus in infirmitate perficitur. þ̅ is

(120 : 1-30)